

源順「あめつちのうた」注釈

源順は延喜十一(九一一)年^{註①}左馬允拳の子として生まれ、永観元(九

八三)年七十三歳で卒した。天曆七(九五三)年文章生に補せられた時既に四十三歳、庇護者であった源高明の失脚もあり、官職には恵まれず従五位上能登守におわっている。奨学院に学び『倭名累聚抄』を編むほどの学識を有した順は、天曆五年撰和歌所の召人として万葉集読解及び後撰集撰進に携わるなど、和漢にわたる才を示した。「あめつちのうた」は、源順集に収められている「あめつちの詞」を歌の上下に据えた杳冠歌四十八首の歌群である。詞書により藤原有忠が「あめつちのうた」に深い関心をもっていたことは明らかだが、「たるにのうた」を『口遊』に収めた源為憲が順の弟子であったことを考えあわせると、音韻に関心をもつ人々が順の周囲に集まっていたといえよう。

この通釈は底本として源順集(図書寮五一・二)を用い、校合には源順集(図書寮五〇一・一四三以下図本と称す)を用いた。なお、4歌は底本では8の位置にあるが、図本に従い直している。

あめつちのうた四十八首、もとふぢはらのありただあぎなあむ、よめるかへしなり、もとのうたは、かみのかぎりにそのもじをすへたり、このかへしは下にすゑ、ときをもわかちてよめるな

り

通釈 あめつちのうた四十八首。もとの歌は藤原有忠字あむが詠み、これはその歌の返しである。もとの歌は、上だけにその文字をすえていた。この返しは下にもすえ、時をもわけて詠んだものである。

語釈 ◎あめつちのうた 「あめつち」の詞を詠みこんだ歌。「あめつちの詞」は、平安初期の清音四十八首を重複しないように用いて作られている。ア行の「衣」とヤ行の「江」とを区別するが、順の歌においては区別されていない。順の時代、十世紀半ばには既に混同されていたことを示している。「あめつちの詞」は「あめ(天)つち(土)ほし(星)そら(空)やま(山)かは(川)みね(峰)たに(谷)くも(雲)きり(霧)むろ(室)こけ(苔)ひと(人)いぬ(犬)うへ(上)すゑ(末)ゆわ(硫黄)さる(猿)おふせよえの江をなれるて」である。「おふせよ」以下の解釈は諸説^{註②}ある。◎ふぢはらのありただあぎなあむ 藤原有忠。右大臣藤原恒佐の男。従四位上左馬頭。母藤清貫女。『尊卑分脈』には「歌人」とある。◎そのもじをすへたりこのかへしは下にすゑ 底本「そのもじを末」図本による。

原田真理

春

1 あらさじとうちかへすらし小山田のなはしろ水にぬれてつくるあ

通釈 荒らすまいと思つて打ちかえしているのだろう、山田の苗代の水にぬれながら作る畦よ。

語釈 ◎小山田 「小」は接頭語。山あいの田。◎あ 畦。

2 めもはるにゆきまもあをくなりけり今こそ野べに若なつみてめ

通釈 春をむかえて見渡す限り草の芽も芽吹き、雪の溶けた所もすっかり青くなつたことよ。さあ野辺に出て若菜を摘もうよ。

語釈 ◎めもはるに 目も遙に。見渡す限りの意に、「芽も張る」「春」をかける。古今集雑歌上・八六八、伊勢物語四十一段「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」◎ゆきま 底本「雪に」図本による。雪の消えた所。古今集恋一・四七八「かすがののゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」枕草子三段「七日。雪まのわかなつみあをやかに」◎わかなつむ 人日（一月七日）や子の日に、若菜を摘み羹にして食べる風習があつた。《参考》古今集春歌上・一八「かすがののとぶひののもりいでて見よ今いくかありてわかなつみてむ」

3 つくば山さける桜のにほひをばいりておらねどよそながらみつ

通釈 筑波山に咲いた桜の美しさにひかれ、山にわけいつて手折つたりこそしないけれど、遠くからはるかにながめたことだよ。

語釈 ◎つくば山 筑波山。今の茨城県にあり、万葉集にも詠まれている歌枕。

4 ちぐさにもほころぶ花のにしきかないづら青柳ぬひし糸すぢ

通釈 いろいろな色に咲きほころぶ花は、錦というべきだなあ。こんなにほころんだ錦のどこにあるのだろう、青柳が縫つた糸の筋は語釈 ◎ちぐさ 種類の多いこと。◎ほころぶ 花が咲く。「ほころぶ」「錦」「縫ふ」「糸」は縁語。◎青柳ぬひし糸すぢ 古今集春上・

二六「あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける づらゆき」

5 ほのく〜とあかしのはまを見わたせば春の浪わけ出るふねのほ

通釈 ほんのり明けてゆく明石の浜をはるかにながめると、この春の波を分けながら沖へ出てゆく舟の帆が見えるよ。

語釈 ◎明石のはま 兵庫県明石市の海岸。「明し」を掛ける。古今集羈旅・四〇九「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」

6 しづくさへ梅のはながさしるきかな雨にぬれじときみやかくれし

通釈 梅の花笠は、それにやどるしづくまでもがはつきりわかることだよ。あなたは雨にぬれまいと、そこへ隠れたのだろうか。かくれてもちゃんとわかつているよ。

語釈 ◎梅のはながさ 古今集神遊歌一〇八一「あをやぎを片糸に

よりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」◎きみや 底本「きや」図本による。

7そこさむみむすびし氷うちとけていまやゆくらん春のたのみぞ

通釈 底が寒いのでそこに結んだ氷も、いま春になって解けてながれてゆく、それとともに、春になったらよいことがあるだろうと頼みにしていた望みも実らないままに時が過ぎてしまうことよ。

語釈 ◎そこ 「底」と指示語「そこ」をかける。◎さむみ「み」は理由をあらわす接尾語。寒いので。◎春のたのみ 春にかけた頼み。一般的な期待とも、国司に任命される期待ともとれる。国司を任命する県召しの除目は、正月に行われた。除目にかける人々のようすは、『枕草子』『除目に司得ぬ人の家』に描かれている。『元輔集』「正月申文つけて侍りし蔵人に 露の命もしとどまりてありふとも今年ばかりぞ春の望は」

8らにもかれ菊もかれにし冬のよもえにけるかなさをやまのつら

通釈 蘭も枯れ菊も枯れてしまった冬の夜であつたが、いま春になつて萌えているよ、佐保山の面は。

語釈 ◎らに 蘭。◎らにもかれ菊もかれにし冬の夜の 「もえにける」を導く序。◎もえにける「燃えにける」「萌えにける」の掛詞。枯木や枯草を燃やして ◎さをやま 佐保山。奈良市北方の丘陵。平城京の東方にあり、五行説によると東は春に当たることから、佐保姫は春の女神とされる。

夏

9やまも野も夏草しげく成にけりなどかまだしき宿のかるかや

通釈 山も野原も夏草が生い茂ったことよ。どうして我家の刈萱はまだ茂らないのだろう。

語釈 ◎かるかや イネ科の多年草。オガルカヤとメガルカヤがある。

10まつ人もみえぬは夏もしら雪の猶ふりしけるこしのしらやま

通釈 私が待つあの人の姿も見えないのは、夏でもやはり白雪が一面に降りしきるあの越の白山というわけなのだろうか、あの人は「来じ」というのかしら。

語釈 ◎こしのしらやま 越の白山。越前、今の石川・富山・福井・岐阜県にまたがる白山。「来じ」(来るまい)を掛ける。

11かたこひに身をやきつつも夏虫のあはれわびしき物を思ふか

通釈 報われない片思いの炎に身をこがしながら、ああ私もあの火に飛びこんでゆくはかない夏虫のように、つらい物思いをすることよ。

語釈 ◎かたこひ 片恋。片思いの恋。「ひ」「やく」は縁語。
《参考》古今集恋二・六〇〇「夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり みつね」

12はつかにも思ひかけてはゆふだすきかもの川浪立よらじやは

通釈 ちらつと見えただけのあなたに恋をして、一日として忘れられない。加茂川の波ではないけれど、あなたも私に心を寄せてくれないはずはないだろうね。

語釈 ◎はつかにも 古今集恋一・四七八「かすがのゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」により、わずかだけ見えたあなたなのに、の意。◎ゆふだすき 木綿襪。神事に奉仕するとき用いた木綿のたすき。古今集恋一・四八七「ちはやぶるかもの社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし」により、あなたを思わない日は一日としてない、の意。

13みをつめば物思ふらし時鳥なきのみまどふ五月雨のやみ

通釈 あれこれ物思いをしているらしいと身につまされるよ、時鳥が鳴き騒いでいる声ばかりが聞こえる五月雨の闇の中にと。

語釈 ◎みをつめば 身を抓めば。身を抓む（自分の身をつねって他人の痛みを知ることから）自分の身によそえて他人に同情する意。拾遺集恋二・七三〇「身をつめば露をあはれと思ふかな暁ごとにかでおくらん」

《参考》後撰集夏・一六三「このごろはさみだれちかみ郭公思ひみだれてなかぬ日なぞき」

14ねをふかみまだあらはれぬあやめ草人をこひぢにえこそはなれね

通釈 根が深いので引いても引いてもぬくことができない菖蒲草が

泥土から離れないように、あなたをひそかに深く愛している私は恋路から離れることができないのだよ。

語釈 ◎あやめ草 菖蒲。邪気を払うとされ、五月五日には軒に葺いたり根の長さを比べてもてあそんだ。◎こひぢ「泥土」と「恋路」の掛詞。

15たれによりいのるせゞにもあらなくに浅くいひなせおほぬさにはた

通釈 あなた以外の誰のために祈る瀬でもない、ひたすらあなたのことを祈っているのに、あなたはこの心をわかつてくれない。よし、あなたは私のことをあの業平のように浮気者だと勝手に言いなさいよ。

語釈 ◎なくに ないのに。◎おほぬさ 大幣。祓えの時けがれを移し、その後川に流した。伊勢物語四七段・古今集恋四・七〇六「おほぬさの引くてあまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」以来、浮気なものをたとえた。古今集雑体・一〇四〇「我をのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほぬさにして」

16にはみればやをたでおひてかれにけりからくしてだに君がとはぬに

通釈 庭を見ると、八穂蓼が生えていたがそれも枯れてしまったよ、この蓼がからいように、あなたが私にからく冷淡な態度でまれにさえ訪れない間に。

語釈 ◎やをたで 底本「やはたち」図本による。八穂蓼。多くの

穂の出た蓼。蓼はタデ科のタデ属。ヤナギタデやアザタデは葉を香辛料として食す。万葉集卷十六・三八六四「わらはどもくきはなかりそやほたでをほづみのあそがわきくさをかれ」◎からく 辛く。蓼が「辛い」と、恋人が冷淡で訪れが「かれがれ」（まれ）である意を掛ける。

秋

17くれ竹のよさむにいまはなりぬとやかりそめぶしに衣かたしく

通釈 もう今は夜の寒さが身にしむようになったというのか、ちょっと横になるときも衣を片敷くことだ。独り寝のさびしさがいつそう身にしむことよ。

語釈 ◎くれたけの「よ」を導く。竹のよは、節と節の間。◎よ竹の「よ」と「夜」の掛詞。◎ころもかたしく 自分ひとりの衣だけ敷いて寝ること。独り寝。万葉集卷十・二二六五「はつせかせかくふくよひはいつまでかころもかたしきわがひとりねむ 人まろ」◎かりそめぶし かれそめに伏すこと。

18もがみがはいなぶねのみはかよはずておりのほり猶さはぐあしがも

通釈 最上川は稲舟が有名だけれど、通っているのはそれだけではなく、下ったり上ったりしながら相変わらず騒いでいる葦鴨がいるよ。

語釈 ◎もがみがは 最上川。山形県を流れ、日本海に注ぐ。古今集東歌一〇九二「もがみがはのほればくだる稲舟のいなにはあらず

この月ばかり」◎いなぶね 底本「いなぶた」図本による。稲舟は稲を積んだ舟。◎おりのほり 下ったり上ったり。

19きのふこそゆきてみぬほどいつのまにうつろひぬらんのべの秋はぎ

通釈 ほんの昨日行って見たばかりなのに、いったいいつの間に色変わりしてしまったのだろう野辺の秋萩は。

語釈 ◎きのふこそいつのまに 古今集秋歌上・一七二「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く」

20りんだうも名のみ成けり秋の野の千草の花のかにはおとれり

通釈 かおりがすばらしいといわれるりんどうも評判だおれというものだ、秋の野に咲き乱れたたくさんの花の香には劣っているよ。

語釈 ◎りんだう 龍胆。和名抄「龍胆 陶隱居本草注云龍胆 衣夜美久佐一云邇可奈 味甚苦 故以胆為名也」

21むすび置て白露をみるものならばよるひかるてふ玉もなにせん

通釈 あの人と契りを交わしてともに白露を見るものなら、あの夜光るといふ宝玉もどれほどのことがあろうか。

語釈 ◎むすび置て 「(露が)結び置きて」と「(契りを)結んで」の掛詞。◎夜光るてふ玉 夜光玉。夜光璧。宝珠の名。暗夜に光を発する名玉。夜珠、夜明珠(大漢和辞典)「南海有珠、即鯨目。夜可_レ以、謂之夜光」(『述異記』)

22 ろもかぢも舟もかよはぬ天の川たなばたわたるほどやいくひろ

通釈 櫓も梶も役に立たず舟も通わない天の川、織女が渡るとき、その幅はいつたい幾尋あるのだろうか。

語釈 ◎ろ 櫓。◎かぢ 梶。◎いくひろ 幾尋。尋は両手を広げた長さ。◎たなばた 織女。中国の伝説では、織女が天ノ川をわたる。万葉集卷十・二〇〇〇「あまのがはみづさへにてるふねはててふねなるひとはいもとみえきや」

23 この葉のみ降しく秋は道をなみわたりぞわぶる山川のそこ

通釈 木の葉ばかりが降ってきて一面に敷き積もる秋は、散り敷いた落ち葉で道がなくなってしまうので、山川のそこもわからず渡るに渡れなくて困ってしまうよ。

語釈 ◎道をなみ 「な」は形容詞「無し」の語幹。「み」は理由をあらわす接尾語。「無いので」の意。

24 けさみればうつろひにけりをみなへし我にまかせて秋ははやゆけ

通釈 今朝みると、あのうつろひしかった女郎花が色あせてしまっているよ。この女郎花は私にまかせて、秋は早く行ってしまえ。

語釈 ◎うつろひにけり 「うつろふ」は、色あせる。色変わりするの意。◎をみなへし 女郎花。秋の七草の一。女性をたとえることが多い。これもその例。男性に飽きられてしまいうちひしがれている女性の姿に、擬人化している。◎秋 「飽き」を掛ける。秋を、女性をもてあそんだあげく飽きてしまった男性にたとえる。

《参考》古今集秋上・二三七「をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば」

冬

25 ひをさむみ氷もとけぬ池なれやうへはつれなきふかきわがこひ

通釈 寒い日が続くので表面に張った氷はとけることなく、その底知れぬ深さは人に知られない池。それと同様なのか、うわべはさりげなくふるまいながら実は深く思っている私の恋は。はやくこの思いの深さをわかってほしいものだ。

語釈◎ひ 天気。

26 とへといひし人はありやと雪分て尋きつるぞみわの山本

通釈 「尋ねておいで」と言ったあの人が元気だろうか、雪を踏み分けて尋ねてきたんだよ、この三輪の山本に。

語釈 ◎とへといひし 古今集雑歌下・九八二「わがいはほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」◎みわの山本 前項参照。三輪山のふもと。三輪山は奈良県桜井市にあり、大神神社の御神体である。◎雪分けて 古今集雑歌下・九七〇「わすれては夢かと思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」

27 いづこともいさやしら浪たちぬればしたなる草にかけるくものい

通釈 どこにあるとも全く知れなかったけれど、白波がたつとそのしずくのおかげでありがたかわかるよ。なるほど下草にかかっていた

んだな、蜘蛛の糸は。

語釈 ◎しら浪 「白波」と「知らぬ」の掛詞。◎いづこともいさや 頭韻をふむ。◎いさや 「いさ」副詞。さあどうだろう。「や」疑問の係助詞。古今集春歌上・四二「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔のかににほひける」

28ぬるごとに衣をかへす冬のよのゆめにだにやは君が見えこぬ

通釈 あなたに逢えないまま一人さびしく寝る冬の夜、せめて夢の中であなたに逢いたいと横になるたびに衣を返すのだけれど、その甲斐もなくあなたの姿は見えてこないのだよ。

語釈 ◎衣をかへす 衣を裏返して寝ると、恋しい人の姿を夢にみるという俗信があった。古今集恋二・五五四「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」

29うちわたしまつ網代木にいとひをの絶てよらねばなぞや心う

通釈 川一面に張り渡して待っている網代木に水魚が全くよらないので、これはどうしたことかと悲しいよ。

語釈 ◎うちわたしまつ 万葉集卷十一・二七〇八「あだびとのやなうちわたすせをはやみころはおもへどただにあはぬかも」◎網代木 くいを組んで魚を捕えるようにした網代の木。冬、水魚を捕えるのに用いた。◎いと 副詞。下に打消の語をともなつて、全然、全くの意。◎ひを 水魚は鮎の稚魚。◎心う「心憂」と鵜との掛詞。鵜は水中に潜り、魚を捕える。水魚の縁語。

30へみゆみのはるにもあらで散花のゆきかと山にいる人にとへ

通釈 蛇弓を張って射るといふのではないが、春でもないのにもう散っている花は雪なのかと山に入る人に聞け。

語釈 ◎へみゆみの 蛇弓の。「はる」を導く序。蛇弓は、曲がった木で作られた弓。「横飛鳥箭、半転蛇弓」(梁簡文帝、「九日侍皇太子楽遊苑詩」)◎いる 「入る」の掛詞。「へみゆみ」「はる」「いる」は縁語。

《参考》古今集春歌下・一二七「あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな」

31すみ山のもえこそまされ冬さむみひとりおき火のよるはいもねず

通釈 炭山がいつそう激しく燃えることよ。冬の夜寒いので一人起きて燠火にあたっている夜は、思い焦がれて寝ることもできないのだ。

語釈 ◎おき 「起き」「燠」の掛詞。「燠」は赤くおこった炭火。

32ゑごひする君がはしたか霜がれの野になはなちそはやく手にすゑ

通釈 餌を欲しがっているあなたのほしだかは、霜枯れの野には決して放すなよ。早く手にすえなくては。

語釈 ◎ゑごひ 餌を欲しがること。◎はしたか 鷹の一種。小鳥を捕る鷹狩に用いた。

思

33 ゆふさればいとゞわびしき大井川かゞり火なれや消かへりもゆ

通釈 夕暮れになると、一層せつなさがつる大井川の景色だよ。

この私の物思いは篝火なのだろうか、消えかかつてはまた激しく燃え上がることよ。

語釈 ◎ゆふされば 古今集恋一・五四五「ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ」◎大井川 京都市の嵐山のふもとを流れる。遊覧の地として知られる。「多し」との掛詞。

34 わすれずもおもほゆるかな朝なくしが黒髪のねくたれのたわ

通釈 忘れられずいつも恋しく思われることよ、共寝したあくる朝あなたの黒髪が寝乱れたわんでいたことを。

語釈 ◎し 代名詞。万葉集卷五・恋男子名古日歌「……さきくさのなかにをねむと うつくしく しがかたらへば……」◎ねくたれ 寝腐れ。寝乱れてしどけないようす。

35 さゝがにのいをだにやすくぬぬ比は夢にも君にあひみぬがうさ

通釈 蜘蛛の糸のようなほんの少しの間すら、あなたを思ってはなかなか寝られない。そんなときせめて夢の中であなたに逢いたいと思うのに、眠れないからそれすら叶わないのがつらいことだ。

語釈 ◎さゝがにの 「い」を導く。◎い 「糸」「寝」の掛詞。

36 るり草の葉にをく露の玉をさへ物思ふときは涙とぞなる

通釈 るり草の葉に置く露の玉であっても、物思いをする私には涙だと思われるのだよ。

語釈 ◎るり草 むらさき科のルリソウ属。産地の林内に生える多年草。「るり」は「瑠璃」を響かせている。「瑠璃」は七宝の一。青色の宝玉。青金石。

37 思ひをも恋をもせじのみそぎすとひとがたなでゝはてくはしお

通釈 物思いも恋も金輪際すまいとして裸をするというので、人形で我身をなでて、その果ては潮に流れてゆくのだ

語釈 ◎みそぎ 裸。身のけがれを払うこと。人形をつくり、それにけがれを移して川へながした。◎はてくはしお 人形が流れて海へゆく意と清めの塩をかけた。古今集恋一・五〇一「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」

38 ふく風につけても人を思ふかなあまつ空にも有やとぞ思ふ

通釈 吹く風につけてもあの人のことが思われるよ。こんなに思われるのは、恋しいあの人は空にいるのかしら。

《参考》古今集恋一・四八四「夕ぐれは雲もはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて」

39 せは洲にさみだれ川の成ゆけば身をさへうみに思ひこそませ

通釈 五月雨が降るといつもの浅瀬が淵になってしまふ。そんなときあなたへの恋の思ひは一層つより我身が憂くつらく海になつたかのように思われるのだ。

語釈 ◎さみだれ川 五月雨の降るころの川。水嵩が増し、浅瀬であつた所が淵になる。◎うみ 「憂身」「海」の掛詞。「憂身」はつらい我身。「せ」「淵」「さみだれ川」「うみ」は縁語。

40よし野川その岩波いほでのみくるしや人をいほで思ふよ

通釈 吉野川の底の岩にぶつかる波は激しいけれど、表面からはそれとわからない。そのように私も口に出さなだけで心の中で深く思っているのだよ、ああ苦しいことよ、それと告げないで思っているわが恋は。

語釈 ◎よし野川 奈良県を流れる。激流で知られる。◎よし野川その岩波 「いは」を導く序。

《参考》古今集恋一・四九二「吉野河いはきりとほし行く水のおとにはたてじこひはしぬとも」

恋

41えもいはで恋のみまさる我身かないつとやいほにおふる松のえ

通釈 あの人への思ひを告げることもできないで、恋心ばかりがつる我身であることよ。いつたいいつ告げようと思ひながら、岩に松が生えるように長い間うちあける機会を待っているのだ。

語釈 ◎いほに 「言はに」「岩に」の掛詞。◎まつ 「松」「待つ」

の掛詞。

42のこりなく落る涙はつゆけきをいづらむすびし草村のしの

通釈 留まることなくこぼれおちる涙は露っぽいが、露が草むらの篠に結ぶように結んだ。あの約束はどうなつたのだろう。

語釈◎しの 篠。小さい竹。◎むすぶ 願いをこめて草などを結ぶ意と露が置く意。

43えもせかぬ涙の川のはてくやしるて恋しき山はつくばえ

通釈 あなたを思つて流す涙はせき止めることなどできず、川となつてながれてゆく、その涙川の果てというわけなのか、どうしても恋しくてたまらない山はつくばえだ。

語釈 ◎つくばえ 「筑波ね」の意か。凶本「やまぬつくまえ」

44をぐら山おほつかなくもあひぬるかなくしかばかり恋しき物を

通釈 小倉山ではないけれど小暗い中、心もとない状態でおあいしたことよ、あの小倉山に鳴いている鹿のようにこれほどあなたが恋しいのに。

語釈 ◎をぐら山 山城と大和の両国にある。「小暗」をかけ、「おほつかなくも」とつながる。◎しか 「然」「鹿」との掛詞。万葉集卷八・一五一五「夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜鳴かずいねにけらしも」

45 なきたむる涙はそでにみつ塩のひるまもだにも相見てしがな

通釈 あなたに逢えないで流す涙は袖にあふれるばかり、あの満ちている潮が干く間、せめて昼間にでもお逢いしたいものだ。

語釈 ◎そでに 底本「そこに」図本による。◎ひるま 「干る間」「昼間」の掛詞。本当は夜に逢いたいのだが、それが無理ならせめて昼間逢いたいというのである。

46 れうしにもあらぬ我こそ逢ことをともしの松のもえこがれぬれ

通釈 狛師でもない私だが、あなたと逢うことが乏しく待つばかりなので、ともしの松のように恋の思いに身を焦がしているよ。

語釈 ◎ともし 「照射」「乏し」の掛詞。照射は、狛師が鹿をおびきよせるため火を燃やすこと。◎まつ 松明の「松」と「待つ」の掛詞。「れうし」「ともしの松」「もえこがれ」縁語。

47 めてもこひふしてもこふるかひもなみかくあさましくみゆる山の

通釈 起きているときも寝ているときも恋しく思っている甲斐も無く、あなたの方では私に対する愛情はとほしくてこんなにあきれた仕打ちをするのだな。

語釈 ◎山のぬ 山にある井戸。万葉集卷十六・三八二九「あさか山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」◎あさましく「浅し」との掛詞。

48 てる月ももるゝ板まのあはぬよはぬれこそまされかへすころもで

通釈 あばらやなので板の継目もびったりとは合わず、すきまから冷やかな月光がもれてくる。あなたに逢えない夜はせめて夢の中で逢いたいと衣をかえてみるのだけれど、その甲斐も無くただひたすら袖は涙でぬれるばかりなのだ。

語釈 ◎あはぬ 「(板間が)合はぬ」「(恋人に)逢はぬ」の掛詞。◎かへすころもで 参照28番歌。

注①「歌仙伝」には、「左馬允攀二男」とある。

注②四十七音を重複しないように作られた歌。「大為爾伊天(田居に出で)奈徒武和礼遠曾(菜摘む我をぞ)支美女須止(君召すと)安佐利於比由久(あさり追い行く)也末之呂乃(山城の)宇知恵倍留古良(うち酔へる児ら)毛波保世与(藻は干せよ)衣不禰加計奴(え船繋げぬ)」

注③大矢透「生ふせよ 榎の枝を馴れ居て」「古言衣延弁証補」「音図及手習詞歌考」○中田祝夫「負ふ 為よ 良篁 愛男 汝 堰」(『日本語の歴史』)○馬淵和夫「負う 為よ 江野 愛男 汝 堰または井手」(『平安・鎌倉時代の音韻』)

(平成二年九月三〇日受理)